風を流す四阿

～風媒蟲歌～

日本人は虫の声をそれとして認識する。

これは近年の研究による知見であり、日本人にとっては古来より備わった当たり前のひとつであろう。

ひと度、月夜に背の高い草本が風に揺れる情景を想えば、

その姿こそ見えずとも、小さな虫たちの声が聴こえてくる。

この四阿は名の通り四方に庇があるだけのもので、一本の大黒柱が風の通り道に干渉することは無い。

当たり前だった、目には見えない「和」は、

きっと確かに頬をかすめ耳元で静かに夏の終わりを知らせてゆく。

風を介した彼らの恋歌は、彼らの思惑そっちのけで日本人にとっての秋到来の風物詩となった。

夜の静けさを強調するように風媒蟲歌が奏でられる。

そんな長閑な平常を楽しむ四阿を提案する。